



(4) 名前のない新聞 No.208 / 2018年11・12月号

遠藤 暁及

危険な道楽、アースキャラバン(3)

— Song of Ahead Tamimi
(アヘッド・タミミの歌) の行方は? —

催涙弾の”パン！！”という射撃音が珍しく鳴り響かない金曜日。それが、僕らがパセムとその17才の娘の、アヘッドが住む、ナビサレ村を訪れた日の午後だった。

いつもなら、イスラエルの一個小隊も展開して、ティーンエイジャー達を危険な催涙弾で撃っている日のはずだった。僕らもその心づもりをしていたのが、村にはのどかに風がなびいているだけで、珍しく平和な空気が漂っていた。

パセムの家は高台にあって眺めが良い。彼は、家のテラスの椅子で親戚たちとくつろいでいた。娘のアヘッドが、つい2日ほど前に、イスラエルの軍事刑務所から釈放されたからだろう。

パセムは、彼の椅子の前に立った僕の顔を見るなり、“あの曲を聞かせて欲しい”と言った。きっと気にしていたのだろう。僕が“アヘッドは?”と返したら、“まだ眠っている”という。



無理もない。彼女は8か月間の収監中、刑務所の劣悪な環境のため、深刻な肺の病気になったが、何の治療も受けさせてもらえなかったのだ。(これは、アミナダブがベツレヘムで演奏するときのステージ担当、サイドから聞いた)

パレスチナ人がイスラエルの刑務所に入れられると、中で拷問を受けるという話を、僕は直接、体験者から聞いたことがあった。だから、タミミ家との交流が深まるにつれ、直接会ったとがなかったにも関わらず、僕はイスラエルの軍事刑務所に送られたアヘッドが毎日心配でならなかった。そのあげく、アヘッドの曲を作ったのだった。

さて、世間話で、いつまでも曲を聴かせるのを先延ばしにするわけにも行かない。僕と鈴木監督は顔を見合わせ、あたかも互いの動悸を聞いているような気分でパソコンをセットした。用意したのは、スタジオ・レコーディングでほぼ完成していた音楽に、サンプル映像を付けたものだ。

鈴木聡監督は電通マンで、CMフィルムでは多数の賞を受賞している。僕の音楽にしても、様々なテレビやラジオ、また有線などで流されてきた。だが、2人ともガンコ親父の前では、まるで自動車免許の試験を初めて受ける生徒のような気分だった。

パセムの隣には、いつの間にか娘のアヘッドが座っていた。午睡から起きたのだろう。彼女は、イスラエル兵に喰らわせたビンタの映像が世界中に拡散されたことにより、パレスチナ・レジスタンスの



アイコン(象徴)となった。

そして今や、世界中のメディアからインタビューを受け、街に出れば、人だかりで歩けないほどだ、という。

珍しく平和な静けさに包まれたナビサレ村、、、パセム家の庭のテラスにセットされたパソコンに映像が現れ、音楽が流れ始めた。やがて3分間が経ち、曲と映像がフェイドアウトしていった、、しかし、誰もが沈黙していた。

それは、僕らにとっては長い数秒間だった。やがてパセムが口を開いた。ひとこと、“ムンタツズ”、と。それはアラビア語で、すばらしい、を意味していた。続いてアヘッドが、“ビューティフル”と言った。

こうして僕ら4人は、パレスチナに自由をもたすため、この曲と映像を世界に広めることを誓い合ったのだった。



後記：10月初旬、松本に新たにタオサンガ国際道場ができた。これを期に、「タオ指圧」と「音楽念佛」の集中合宿修行を行い、ヨーロッパ、カナダ、イスラエル、パレスチナなど、海外からも24名が参加した。

タオ指圧は4日間、朝から夕方までの集中研修で、念佛修行は12時間休みなしで行うという、なかなかハードなものだった。

この合宿に、今回、パレスチナからエリアスが参加していた。僕は、この映像と音楽に涙を流しているエリアスを見て、1日も早く世界に発信したい、と強く心に思った。

